

「エルサレム途上にて」

マルコの福音書 10:32~34

はじめに

今日の箇所は、イエシュアの十字架の死と復活の出来事について、イエシュアご自身の口から弟子たちにはっきりと、前もって語られている場面です。この事実は、私たち教会の信仰の拠り所、中心とも言うべき重要な出来事で、それだけに何度も何度も語られ、また聞かされてきた、聖書の中で最もよく慣れ親しんだ内容ですが、ヘブル語の視点から、今一度そこに目を留める時をもってまいりましょう。

1. 驚きと恐れ

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:32 さて、一行はエルサレムに上る途上にあった。イエスは弟子たちの先に立って行かれた。弟子たちは驚き、ついて行く人たちは恐れを覚えた。すると、イエスは再び十二人をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを話し始められた。

イエシュアはいよいよ十字架にかかれるために、エルサレムへと向かわれます。これについて行く弟子たちは、当然のことながら心中穏やかではありません。彼らが「**驚き**」と「**恐れ**」の中にあつたことがはっきりと記されています。しかしここに使われているバーハル(בְּהַרְל)、ハーラド(חֲרָד)という二つのヘブル語は、本来どちらも身の危険、死に対する恐れではなく、現状が把握できない、今一体何が起きているのか見えない、理解できない、出来事の意味がわからないために生じる混乱、不安な心境、状態を指す言葉です。つまりこの時の弟子たちには、イエシュアの、神のご計画がよく理解できていないということです。しかしそんな彼らの「**驚き**」と「**恐れ**」の中にも、神のご計画が表されているのです。それぞれの最初の言及について見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

45:3 ヨセフは兄弟たちに言った。「私はヨセフです。父上はお元気ですか。」兄弟たちはヨセフを前にして、**驚きのあまり**、答えることができなかった。

45:4 ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか私に近寄ってください。」彼らが近寄ると、ヨセフは言った。「私は、あなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。」

45:5 私をここに売ったことで、今、心を痛めたり自分を責めたりしないでください。神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルの、その 12 人の息子たちに起こった出来事です。11 番目の息子ヨセフは、兄たちの陰謀によりエジプトに売り飛ばされますが、そこで王に次ぐ権力者となり、長い年月を経て再び兄たちと相まみえます。兄たちは「**驚きのあまり**、答えることができなかった」とあり、ここに聖書で最初のバーハルが使われています。ここでヨセフは自分を売った兄たちを責めることなく、これは神がイスラエルの家の「いのちを救う」ためになされた事だと言っています。で

すからバーナブとは本来、**神がイスラエルの家の人々、民のいのちを、滅びから救う**という事実を指し示した言葉であると考えられます。

創世記【新改訳 2017】

27:30 イサクがヤコブを祝福し終わり、ヤコブが父イサクの前から出て行くとすぐに、兄のエサウが獵から戻って来た。

27:31 彼もまた、おいしい料理を作って、父のところに持って来た。そして父に言った。「お父さん。起きて、息子の獲物を召し上がってください。あなた自ら、私を祝福して下さるために。」

27:32 父イサクは彼に言った。「だれだね、おまえは。」彼は言った。「私はあなたの子、長男のエサウです。」

27:33 イサクは激しく**身震いして**言った。「では、いったい、あれはだれだったのか。獲物をしとめて、私のところに持って来たのは、おまえが来る前に、私はみな食べてしまい、彼を祝福してしまった。彼は必ず祝福されるだろう。」

これはアブラハムの子イサクが、息子エサウに長子としての祝福を与えようとした出来事ですが、老齢となり目が見えなくなっていた彼は、誤って、正確には騙されて次男のヤコブの方を祝福してしまいます。

「イサクは激しく**身震いして**言った」という箇所には聖書で最初のハーラドが使われています。そして「彼は必ず祝福されるだろう」と言って、戸惑いながらもヤコブすなわちイスラエルに与えられる神の祝福を宣言しています。ですからハーラドという言葉は本来、**神の祝福がイスラエルに、その子孫、その民に与えられる**事実を指し示した言葉であると考えられます。

このように「**驚き**」と「**恐れ**」と訳されたバーナブ、ハーラドですが、その本来の意味から、これらの言葉は神がイスラエルの民を救い、そして祝福されるという事実、ご計画が指し示された言葉であると考えられ、今日の箇所では、「**弟子たちは驚き、ついて行く人たちは恐れを覚えた**」という様子の中に、それが「型」として表されていると考えられます。そしてその事実はイエシュアが「**エルサレムに上る**」時に成就するということが表わされているのです。それはつまり、世の終わりにイエシュアが再びこの地上に降りて来られる、地上再臨の際、多くのご自分の聖徒たちを伴ってエルサレムに帰って来られる時に成就、実現するということです。イエシュアの地上再臨は、イスラエルの民を滅びから救い、そして彼らを神の選びの民として祝福するためのものなのです。そのために再臨のイエシュアはこの民を地の四方からそのみもとに「**エルサレムに**」お集めになります。その様子もまた「**イエスは再び十二人をそばに呼んで**」という箇所に「型」として表されていると考えられます。イエシュアのなさること、その記述にはすべて意味があり、そしてそれらはすべてやがて必ず成就する神のご計画を指し示しているのです。

2. 死と復活

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:33 「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。

10:34 異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、むちで打ち、殺します。しかし、人の子は三日後によみがえります。」

クリスチャンであるならば、もう何度も聞いたであろうイエシュアの十字架の死と復活についてのこの記述。この御業によって私たちの罪は贖われ、イエシュアご自身が後述しておられるように「10:45 …多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与える」というこの行為によって私たちの罪は赦され、救いの約束が与えられました。イエシュアの十字架の死と復活は、それを受け入れ、信じる者にとっては救いの御業です。しかし受け入れない、信じない者にとっては、逆に滅びを指し示す御業となります。この記述をヘブル語の視点で捉えるとそれが見えてきます。ここには三つのヘブル語がそれぞれ二度ずつ使われ強調されています。それは①「引き渡す」という意味のマーサル(מָסַר)、②「死ぬ、殺す」という意味のムート(מוֹת)、そして③クーム(קוּם)、これは直訳では「起きて起きる」となるように繰り返して記され「よみがえる」と訳されています。それぞれの言葉の最初の言及、その本来の指し示す意味について見てみましょう。

①「引き渡す」マーサル(מָסַר)

民数記【新改訳 2017】

31:3 そこでモーセは民に告げた。「あなたがたのうち、男たちは戦のために武装せよ。ミディアン人を襲って、ミディアン人に【主】の復讐をするためである。

31:5 それで、イスラエルの分団から、部族ごとに千人、すなわち、合計一万二千人の、戦のために武装した者たちが選ばれた。

31:7 彼らは【主】がモーセに命じられたとおりに、ミディアン人に戦いを挑み、その男子をすべて殺した。

31:10 彼らの居住していた町々や陣営をすべて火で焼いた。

これは神がモーセの最後の任務として彼に命じられ、イスラエルに敵対するミディアン人たちを滅ぼすために、兵が「選ばれた」という場面です。ここに聖書で最初のマーサルがあります。このように「引き渡されます…引き渡します。」と訳されているマーサルは本来、イスラエルを苦しめる、敵対するものを滅ぼす「【主】の復讐」を果たす者を指し示す言葉であると考えられます。ですから「人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます」また「異邦人に引き渡します」という記述には、やがてイエシュアがイスラエルの民からも異邦人からも選ばれ、認められ、「【主】の復讐」を果たすただ一人、唯一無二の神の戦士、勇士として立ち、神に敵対するものをみな滅ぼされる、という神のご計画が表わされていると考えられます。

②「死ぬ、殺す」ムート(מוֹת)

創世記【新改訳 2017】

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

エデンの園の中央に植えられた「善悪の知識の木…その木から食べる」こと、それが「死ぬ」と訳されたムートの本来の意味です。それは善と悪を判断し決めること、すなわち裁くことであると言えます。この権威、権利は、統治、支配とも言い換えられる、神だけが持つべきものですので、人がそれを食べる、得ることは許されなかったのです。しかしイエシュアは違います。この御方は神であり、神として裁く権威を持っておられるのです。誰を生かし、そして誰をムート「死」に定めるのか、という権威がイエシュアにはあるのです。それが「人の子を死刑に定め…殺します」という記述には指し示されていると考えられます。

③「よみがえる」クーム(קום)

創世記【新改訳 2017】

4:5 …カインは激しく怒り、顔を伏せた。

4:6 【主】はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

そして「よみがえります」と訳されたクームについてですが、この言葉は本来「襲いかか」る、そして殺すという、ほとんど真逆の意味を持った言葉なのです。最初の人アダムの息子カインは、その弟であるアベルにクーム「襲いかかって」彼を殺しました。カインをそのように仕向けたもの、駆り立てたもの、それは「怒り」激しい怒りであったことが記されています。ですからイエシュアのよみがえり、復活とは、神の激しい怒りの現われという側面をもっていると言うことができます。そしてその怒りの対象は、罪と死であり、またそれをもたらすサタン、悪魔とそれに従うものたち、神に背き、神を神として受け入れないものたちです。なぜなら罪は神と人との関わり、交わりを破壊、断絶し、そして死はそれを永久的、決定的なものとしてしまうからです。

コリント人への手紙 I【新改訳 2017】

15:25 すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。

15:26 最後の敵として滅ぼされるのは、死です。

イエシュアの復活、よみがえりとはこの「死」に対して立ち向かい「襲いかかって」これを殺すこと、人の内に埋め込まれた「死」というシステム、法則を完全に破壊、消滅させることを意味するのです。「死を殺す」とはなんとも不思議な、理解し難いフレーズですが、まさに神の御業と呼ぶべきものです。そしてそれはすなわち「永遠のいのちを与える」ということと全くの同義だということを覚える必要があります。

イエシュアの十字架の死と復活、それは表面的にも神の御業と呼ぶべき、驚くべき奇蹟ですが、そこに表された「型」は、それをさらに超越した事実が表されており、すなわちイエシュアという神の御力、その権威がいかに強大で恐るべきものか、ということが表されているのです。ですからサタンのように、イエシュアに敵対すること、受け入れない、信じない、聞き従わないということがいかに愚かで、恐ろしい結果を生むのかということを知らなければなりません。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

3. 救い

最後に、イエシュア(יֵשׁוּעַ)というこの御名のヘブル語の意味について今一度述べておきたいと思えます。それは「救う」という意味のヤーシャ(יָשָׁא)に由来します。この言葉の最初の言及は、出エジプト記 2:17 にあります。

出エジプト記【新改訳 2017】

2:16 さて、ミディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちは父の羊の群れに水を飲ませに来て、水を汲み、水ぶねに満たしていた。

2:17 そのとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。するとモーセは立ち上がって、娘たちを助けてやり、羊の群れに水を飲ませた。

「モーセは立ち上がって、娘たちを助けてやり。」と訳されている箇所は聖書で最初のヤーシャがあり、しかもここで「立ち上がって」と訳されているのは先ほどのクーム、今日の箇所では「よみがえり」本来は「襲いかかって」殺すという意味の言葉です。つまりここでモーセは羊飼いたちに対し、激しい怒りを燃やし、襲いかかってこれを殺し、娘たちの羊に水を飲ませた、と解釈することができ、それがヤーシャという言葉の持つ本来の意味であると考えられるのです。ですからイエシュアのなさる救いの御業とは、その救いの対象を「追い払」う、拒絶する、受け入れないもの、敵対するものを殺す、滅ぼすという意味だということです。このように、神の救いと滅びは表裏一体です。誰かを救うということは、誰かを救わない、すなわち滅ぼすということなのです。それは神が裁く御方であるということと同義です。裁くとはすなわち分けることであり、神はご自分がお選びになったものとそうでないものとを最終的にはっきりと分けられるということです。またそれは神が愛であるということと同義です。愛とはすなわち選びです。誰かを愛するということは、その他のものを愛さないというのが愛です。たとえばもし私が自分の妻以外の人を妻のように愛したとしたら、それは愛ではなく姦淫です。しかも神の愛はそれよりも更に極端で、誰かを愛するということは、その他のものを憎む、というほどの強烈なものなのです。このように、イエシュアはまさに救う御方であり、同時に滅ぼす御方でもあるのです。

4. 先に立つて

一般的にイエス・キリストという御方は優しい柔和なイメージで捉えられていますが、終わりの日にはそのイメージは全く覆されることとなります。地上再臨のイエシュアは柔和な口バではなく、戦の馬に乗られ、激しい怒り、御怒りをもって来られます。人々はこの御方に恐怖し、震えあがります。ご自身の敵に対して容赦ない攻撃を徹底的に加え、これをこの地上から完全に殲滅されます。おそらくそれは思わず目を背けたくなるような残酷な光景です。しかしイエシュアにはそれをなさる権利があります。なぜなら

イエシュアは先に十字架によってこの地上で最も残酷な仕打ちを受けられたからです。ですからこの御方には復讐する権利があります。自分にむごい死を与えたこの世に対し、この地上に対して、自分と同じ目にあわせることができる権利があるのです。イエシュアの十字架とその死は、その苦しみと痛みはまさにその「型」でもあるのです。神に背くもの、敵対するものがどのような末路を迎えるのかということがそこには表されているのです。そしてそのよみがえり、復活は、それよりもさらにむごい、永遠の火の池ゲヘナを指し示しています。

しかしイエシュアを信じ、この御方を受け入れるものは、イエシュアとつながり、一つになるものですから、その十字架の「型」は、そこに表された、私たちが受けるはずの残酷な結末は、それをすでに、先に受けられたイエシュアによって、もはや過ぎ去った過去のものとなります。今日の冒頭の「[イエスは弟子たちの先に立って行かれた。](#)」というこの記述は、まさにその福音のメッセージを表しているのです。このイエシュアと結ばれる、一つになるということの重要性、その安心感、安堵感を今一度噛みしめていただきたいと思います。

聖霊の助けがありますように。